

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 張 玉萍

戴季陶（1891-1949 年）は、清末に日本に留学し、その後孫文の側近として中国国民党史上に名を知られた有力政治家であり、また『日本論』などの著作で知られる日本通の思想家である。彼は孫文の革命運動の追随者であったのみならず、マルクス主義の中国への紹介者や三民主義の儒教的解釈者、国民党の元老、蒋介石の無二の盟友など、多彩な顔をもつ人物であり、従来からその思想や行動が注目され、また、国共両党間の対立や融和に応じて、後世の評価は大きく揺れ動いてきた。

本論文は、近代中国の対日政策・対日関係において大きな影響力をもった戴季陶の日本観を、その形成・発展・変化の過程にそくして、全面的に考察しようとして試みたものである。とりわけ、戴季陶の日本留学経験やその後の日本との接触が、彼の政治活動や政治思想にどのようにつながるのかを、大量の一次資料を用いて解明しようとした点に、本論文の大きな特色がある。

論文は、序章と本論 7 章、および終章の全 9 章からなり、付録として「戴季陶の来日」と『戴季陶と日本』に関する文献目録を収める。本文は 166 ページで、付録・参考文献を含めると、総ページ数は 197 ページ、400 字詰め原稿用紙に換算すると、約 780 枚の分量になる。

以下、章をおって、本論文の内容を紹介する。まず、序章は、戴季陶に関する先行研究と研究動向を整理し、その問題点と限界を指摘した上で、本論が採用するアプローチと史料の概要を提示する。本論に当たる第 1 章から第 7 章では、ほぼ時系列に沿って、当時の国際関係や政治状況、国内世論の動向などを踏まえつつ、戴季陶の日本観を分析している。

第 1 章「戴季陶の日本との邂逅」は、清末に日本に留学した戴季陶の生活や勉学の様子を限られた史料から再構成し、「日本経験」がその後の彼の人格形成に大きな痕跡を残したことを指摘する。続く第 2 章「辛亥革命期の日本観（1909～1912 年）」では、中国の存亡に強い危機感を抱く戴季陶が、日本の対中侵略の必然性を強く意識し、新聞紙上に「日本敵視論」というべき論陣を張

ったことが、明らかにされる。

さらに、第3章「討袁運動期の日本観（1913～1916年）」および第4章「護国運動期の日本観（1917～1919年）」は、下野した孫文にしたがい袁世凱打倒運動に従事した戴季陶が、革命には日本の援助が必要であるとの政治判断から、一転して「日中提携論」を唱えるに至り、日本の侵略性を意識すると「批判的提携論」を主張したことを指摘する。当時の世論の動向が、反日に傾く中、戴季陶は感情的な反日運動には距離を置き、冷静な日本研究の必要性を説いていた。このことは、後年の『日本論』に結実する彼の対日観の原型を形作った、と著者はいう。

第5章「五・四運動期の日本観（1919～1923年）」は、日本批判の姿勢を維持しつつ、戴季陶が日本の社会主義思潮やデモクラシーの隆盛に刺激を受けて、両国の平民が連合した社会革命を指向すべきだという「対決・連合論」を抱くようになったことを明らかにする。さらに、第6章「国民革命期の日本観（1924～1928年）」は、日本訪問を通して、戴季陶の日本認識がますます厳しくなっていく過程をたどり、日本が彼にとって提携や援助を期待する対象から、中国革命の遂行のための参照項に変じたと述べる。彼の日本研究の集大成ともいえる『日本論』は、かくして「中国自強論」と表裏一体をなす「幻滅的日本論」に彩られることになった。

国民革命後、中国国民党の元老、対日政策の策定者になった戴季陶は、近代的民族国家の建設と「剿共」を優先課題に掲げ、文化論的立場（王道論）から日本を批判した。第7章「国民革命後の日本観（1929～1949年）」は、こうした彼の認識を「日本非敵論」と位置づけている。終章では、以上のような各時期の日本論を総括して、その変遷の軌跡を次のように整理している。すなわち、辛亥期の「日本敵視論」から一変して討袁期の「日中提携論」になり、護法期にはこの両者を基礎にして「批判的提携論」を唱えた。五・四期には前の時期の日本批判と提携の対象を明確化して「対決・連合論」を主張したが、国民革命期には「幻滅的日本論」に到達した。国民革命以後は、日本の中国侵略の激化という現実問題に対処するため「日本非敵論」を抱くようになったが、各時期の種類の日本論・日本観の根底には、それらと表裏一体をなすかたちで「中国自強論」が持続していたのだ、と。

以上のような、構成と内容を持つ本論文は、当時の変転きわまりない政治環境を背景に、戴季陶の曲折した政治行動や対日認識を詳細に分析している。文

中では、戴季陶の思想の分析と並んで、当時の国内世論や孫文の対日態度なども論じられているが、平明で論理的な表現・文体で書かれているので、全体の叙述の流れは理解しやすい。また、大量に引かれる一次史料の扱い方や読解も正確で、学術論文としての体裁を十分にそなえている。本審査委員会は、本論文を戴季陶研究のみならず、近代中国史・日中関係史・中国国民党史研究への新たな貢献として高く評価する。より具体的に、本論文の長所を挙げてみると次のようになるであろう。

第一に、従来しばしば戴季陶研究につきまってきたイデオロギー的評価から離れて、新発掘の史料なども駆使しながら、戴季陶の実像をできるだけ内在的・客観的に解明しようとしたこと。

第二に、断片的恣意的な紹介にとどまってきた戴季陶の日本論の全体像を、時間的な変化を追いつつ、一本の太い線として描き出し、かつ各時期の日本観の有機的關係に整合的な説明を与えたこと。

第三に、政治実践者でもあり、文化人・思想家でもあった戴季陶の複雑なパーソナリティを、全生涯を通観した上で明らかにし、さらに彼の政治活動や国内世論の動向との連関を描き出したこと。

以上、総括すれば、中華民国期の対日外交・対日認識において最重要の位置を占める戴季陶という人物を分析することを通じて、近代日中関係の一側面に新たな光を照射したことに、本論文の最大の貢献があると言えるだろう。

もちろん、以上のような長所を持つ本論文ではあるが、今後改善すべき余地がないわけではない。審査委員会では、戴季陶の日本論を支えた「知の枠組み」がいかなるものであったのかに関する検討が不十分なこと、戴季陶が絶えず触発されていた同時代日本の言説への目配りが足りないこと、彼の日本論を一体のものとしてみるのではなく、大きく政治論と文化論に分けて論じるべきこと、などの注文がつけられた。

しかしながら、以上指摘された短所は、本論文の学術的な価値を損なうものではなく、むしろ今後発展させるべき課題であると言える。本論文が、戴季陶や中国国民党史、さらには中華民国史・中国近代史の研究に多大の貢献をもたらし、近代日中関係史の研究に新境地を切り開いたことは疑いない。したがって、本審査委員会は一致して、博士（学術）の学位を授与するのにふさわしいものと認定する。